

し且つ附録として明治以降の書籍目録三百八十五部の名を挙げなほそれらの中三十三部を選んでコロタイプ版に附し各の體裁を示して居る。眞に好古家でなければ出来ない仕事であり、蒐集の苦心に至つては蓋し第三者の窺察を許さざるものがあらうと思ふ。巻頭の雜感も興趣甚だ豊である。その中に元祿には六百七十七種の俳書が出て居て俳書出版の絶頂を示して居るさへる如きこれらの目録の中にもその時代の動きが看取される様である。

近來古書に對する趣味が漸く興つてそれに關する専門の雜誌すら數種出て居る位でありこの著も一はそうした機運に促がされて世に出たものであるかも知れないが企ては正しく成功し著者の勞を充分に償つて居る。余輩は世の好古家がこれに倣つて續々その收藏を公開せられん事を希望する次第である。(和裝菊判一〇二頁、圖版十六葉) 非賣品、京都杉浦丘園發行(肥後)

● 朝鮮支那文化の研究

京城帝國大學法文學會編

本書は京城帝國大學法文學會第二部論纂第一輯として

發行されたもので、今西龍教授の「洌水考」を初めとして小倉進平氏の「西洋人によつて蒐集せられた早い時代の朝鮮語彙」小田省吾氏の「李子朝鮮時代に於ける倭館の變遷就中絶影島倭館に就て」高橋亨氏の「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」藤塚鄰氏の「李朝の學人ニ乾隆文化」加藤常賢氏の「舅姑甥稱謂考」玉井是博氏の「唐の賤民制度ニその由來」鳥山喜一氏の「猛安謀克ニ金の國勢」幸島驍氏の「金聖歎の生涯ニその文藝批評」の九篇が收められてゐる。先づ「洌水考」には洌水が大同江である事を論證し、附論として列、樂浪は先秦時代に大同江を中心にして在つた朝鮮國內の地名水名であり、又樂浪郡治の所在地は王險城即ち今の江北の平壤地方であつたであらうと述べ「西洋人によつて蒐集せられた早い時代の朝鮮語彙」は之を三期即ちWilson, Broughton, Hall時代 Klapproth 時代 Siebold, Medhurst 時代に分ちて、當時の歐洲語學界の狀況を、古い時代の朝鮮語の姿を觀察し、「李氏朝鮮時代に於ける倭館の變遷」は之を三浦倭館、齋浦倭館、富山浦倭館、絶影島倭館、豆毛浦倭館、

草梁倭館の六期に分つて其の變遷を述べ「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」は李退溪奇高峰の四七論争（附崎門學派）李退溪、李栗谷の四七説、四七論争ミ朱子の學説、嶺南學派の四七説、畿湖學派の四七説、農巖門派の四七説の六章を立て、此の二大學派の發達を叙述し其他の諸篇何れも朝鮮支那の思想、社會制度等の考證研究に係るもので學徒を啓發するに少くない（菊判六〇三頁、東京刀江書院發行、價三・七〇）〔松野〕

● 丹後地震誌

昭和二年三月突如として奥丹後を中心とし近畿を襲つた大地震は、但馬地方の震災後幾許も無く關東大地震の追憶未だ新なる時であつた。けに、人々に地震災害の如何に慘憺たるものであるかを如實に示したのであつた。然し星移り年變るに共にも兎もすれば、ある天災も吾人の記憶の外に薄らぎゆき勝であるから、其の模様の詳細な記述は痛ましい災害のこよなき記念碑であるに共にも後世の戒ともなるものである。かの安政大地震の後に出了た記録の如きも、常に避難の注意に於てのみならず震災輕減

を圖らうとする例へば家屋の建方の研究に於ても去る關東大地震後唱へられたものミ大差なかつたではないか。爰に丹後の地震を記録する丹後地震誌が、當地の熱心なる郷土史家にして自ら災厄に罹れる永濱宇平氏の手につたことは最も有意義な企であるに共にも又其の人を得たものミ云はねばならぬ。

本書は大綱を前紀、本紀、後紀の三編に分ち、前紀に於て先づ諸學者の手に成れる學術調査の結果を概説し、溯つて丹後地方に於ける地震の歴史に於て古書を涉獵し地震に關聯せる火山、温泉、洪水の如き自然現象ミ、改元、餓辰、劫火の如き人事現象に於て豊富な資料を集録してゐる。中にも今回の丹後地震の災害を著者の直接見聞せる處より綴れるものは最も吾人の魂をうつ所である而して本紀に於ては地震の原因に關する所説の發達を叙述して北丹地震の原因に及び、そが地塊運動に基ける地ニ地震であり其の性質は日本群島を横斷する方向に震動の強かつた所謂横震で、順調な餘震があり安定に歸したことを述べてゐる。次に其の震源に關する學者の諸報告